派遣報告書

氏名：フィオレッティ・アンドレア

派遣先：ローマ、イタリア

派遣期間：2011 年 10 月 1 日～2012 年 2 月 29 日
2012 年 4 月 1 日～2012 年 9 月 1 日

2012 年 8 月 31 日、昨年 10 月に開始したローマ・ラ・サピエンツァ大学との共同学位プログラムを終了した。

ローマ大学では、東洋学部で日本語・日本文学を教えるマティルデ・マストランジェロ教授の指導を受けた。同教授には、博士論文の提出（2014 年 3 月の予定）まで、ひき続き研究指導をしていただく。

マストランジェロ教授は日本文学の著名な翻訳者であり、現在は特に日本の落語を研究している。日本の話芸は私の研究と密接な関連性をもつ分野であるため、今後の研究にとってきわめて有益な指導を受けることができた。

私の研究の出発点は、近代小説における直接話法と引用符の使用という、文学の表現形式でも、やや特殊で限定された側面にある。当初は、現代小説の中でも使われている引用符が具体的にどの時代に始まったかを確認するべきだと判断し、書物・印刷・出版業の歴史、書誌学などを、もっぱら研究の対象とした。だが、そうした領域を探っても引用符の問題を解くことはできなかった。なぜなら一般に、文献学や書誌学の関心は、同一テクストの異なる版に見いだされる異文や字句の違いにあり、引用符のような問題は二義的と見なされているからである。したがって、むしろナラトロジーや、特に読書の歴史といった領域に開かれた研究を行うほうが有益であると気づいた次第である。

この意味でロザマリーア・ロレテッリ（ナポリ大学教授、英文学）の『小説の発明―口承性から黙読へ（“*L'invenzione del romanzo. Dall'oralità alla lettura silenziosa*”）』（Laterza, 2010）という論文からとても貴重なヒントを得た。引用符の問題を直接扱っているわけではないが、この論文を読んで、直接話法の部分をくくるために特別な記号の使用が始まったのは、読書の新しい方法の誕生と同時であったことが明らかになった。その新しい方法とは、音読から黙読への移行である。日本文学の場合、このテーマは前田愛によって研究されており、特に論集『近代読者の成立』（出版社、2001 年）に収められ「音読から黙読へ」という論文の中で詳しく扱われている。前田の論文では、近代小説における読書の問題がさまざまな角度から分析されているので、博士論文を比較文学的な手法で書いていく上で不可欠な資料となるに違いない。

引用符の使用について、より専門的な情報を得るには、なによりも句読法の歴史を知る必要があることもわかった。だが、研究を始めた時点では、句読法のことは重視していなかった。句読点の役割が読みのリズムを「切る」ことにあるとすれば、引用符はむしろ直接話法、すなわち登場人物の声を語り手の声から「切り離す」ために使われる物であると考えられるからだ。とはいえいまも、引用符を句読点の一要素とみなすことには、留保をつけざるを得ない。おそらく引用符は句読点とは違う役割を果たしているのではないかと考えている。

いずれにせよ、イタリアで手に入れた句読法に関する資料、特に『ヨーロッパの句読法の歴史』（Mortara Garavelli, “*Storia della punteggiatura in Europa*”, Laterza 2008）を参照して、ヨーロッパにおける引用符の使用について様々な情報を得ることができた。また 3 月、

日本に一時帰国した際、日本や東洋における句読法や引用符の歴史を扱った資料（例えば、芝原 宏治、三田 直樹、 林 嵐娟他『知の対流 III　日中韓英の句読法と言語表現』、清文堂、2010 年）も見つけた。私の研究の最大の目的は、具体的にいつ、どのような理由で引用符がヨーロッパや日本の近代小説の殆ど欠かせない要素になったかを明らかにすることである。なぜある特定の時代以降、登場人物の声を語り手の声から切り離して、引用符という「境」の中に閉じ込めることになったのだろうか？

たとえば、音読から黙読への移行とともに小説の中の句読点や、黙読を助ける引用符などの記号の使用が著しく増加したという仮説が立てられるだろう。なぜなら作者と読者の間に立っていた「仲介者」とも言うべき存在（昔はこうした人物が聞き手に本を音読していた）がしだいに姿を消していったからである。ある意味で引用符があの仲介者に取って代わることで、読者の心の中に、劇場の「幕」のように、実際の対話や「声」を聞いているかのような幻覚を引き起こす役割を果たしているのではないかと考えられる。

以前から研究している明治時代の女流作家、樋口一葉の場合を考えてみても、音読は見逃せないテーマである。いやまさしく一葉は自分の研究の出発点と言って差し支えないだろう。かぎ括弧がすでに定着していた明治初期に活躍していた一葉は、古典的な書き方を手放さず、引用符で語り手と登場人物の声を隔離しない文体を選んだのである。

ところで、今回のイタリア滞在中に、一葉の『たけくらべ』と『にごりえ』の拙訳を出版してくれることになっている、ローマの Vecchiarelli（ヴェッキアレッリ）出版社 と連絡を取ることができた。『たけくらべ』の翻訳は数年前に完了したが、『にごりえ』はイタリア滞在中に翻訳した。2013 年の春までに翻訳と注釈と小説の解説を出版社に提出する予定。一葉の文学作品は商業的な成功を見込めるものではないから、現在のイタリアの出版業の状況を考えると、この種の本を刊行できる出版社をみつけることは容易でない。これもまたローマ大学との協定のおかげで得ることのできた重要な成果であると思う。

また、滞在中にアジアとアフリカの文明・文化・社会研究科の活動に参加することができた。例えば、学部と修士課程の試験に立ち会い、学会やワークショップに参加し、大学院のセミナーで発表した。

5 月 2 日～4 日にローマ・ラ・サピエンツァ大学でおこなわれた多文化研究セミナー「他者の読書。翻訳／書き換え、眼差し、表象」“La lettura degli altri. Traduzioni/riscritture, sguardi, rappresentazioni”に参加した。ヨーロッパおよび非ヨーロッパの文学を専門とする研究者が集まり、翻訳理論や比較文学のさまざまなテーマを取り上げた。特に興味深く思われたのは、初日と最終日の発表で、前者は「翻訳／書き換え」を、後者は「表象」をテーマとしたものだった。

ローマ大学博士課程（アジアとアフリカの文明・文化・社会コース）のセミナー「第二期専門講座」に関しては 6 月 26 日～27 日におこなわれた。ローマ大学大学院のセミナーは毎年二回あり、イタリア国内のさまざまな大学から集まる教授や大学院生の前で自分の研究と博士論文の構想を紹介できる貴重な機会である。

例年と異なり今年は、発表者全員が共有すべき課題が設定された。テーマは「日本、中国、台湾、韓国などの東洋諸国におけるナショナル・アイデンティティー」となった。共通テーマが導入されたのには理由がある。参加する大学院生は東洋のさまざまな地域や文化を専攻している。当然ながら研究内容は非常に細分化されている。そのため、参加者同士で問題関心を共有するのが難しく、せっかくのセミナーの機会を十分に活かしきれないことがあった。

そのような事情を踏まえ、私も自分の直接の研究課題を離れ、「翻訳とナショナル・アイデンティティー」をテーマに発表した。研究関心の一つである翻訳理論を切り口にセミナーの共通課題にアプローチした。発表では、特に丸山真男、加藤周一の『翻訳と日本の

近代』（岩波新書、1998 年）と柳父章の『翻訳語成立事情』（岩波新書、1982 年）を参照した。イタリア語に翻訳されていない二つの資料を紹介しつつ、明治以降の日本のアイデンティティー形成に翻訳が果たした役割を考察した。

セミナーでは、私以外にも、ローマ大学や他のイタリアの大学に所属する大学院生、専門家が発表した。そのなかで興味深い発表が二つあった。

初日は、日本国在イタリア公使の星山隆氏が、日本と中国の国際関係の現状、特に日本の政治や社会から見た中国の最近の経済成長について発表した。ローマ大学東洋学部で中心的に扱われている人文科学ではなく、社会、政治、経済的な観点からの議論であったが、今我々が直面している先の見えない時代を考えるうえで、実務の場で現代世界が抱える問題に取り組む外交官の考察を聞くのは、イタリアの東洋研究者にとっても重要で刺激となるものであった。

2 日目は、ローマ大学文学・哲学科比較文学コースのフランカ・シノーポリ（Franca Sinopoli）教授が「比較文学の方法論の問題」をテーマに発表した。シノーポリ教授は比較文学研究の現状を説明し、このアプローチを採用しようとする研究者が参照すべき文献情報と方法論上の注意点を与えた。セミナーは、このシノーポリ教授の発表で終了した。

今回私が参加した専門講座は、教員と大学院生たちが積極的に交流し、研究方法を確認するための有益な機会である。その一方で、このようなセミナーが年二回しかおこなわれないのは残念に思えた。大学院生の個々の研究を底上げするには、より頻繁にセミナーが開催されるべきであろう。しかし、ローマ大学に限らず現在のイタリアの大学を取り巻く財政状況では、こうした教育の機会を増やすことは困難であるという。

最後にもういちど強調するが、今回のローマ大学との共同学位プログラムは私の研究にとって非常に有益なものであった。とりわけ、ローマ・ラ・サピエンツァ大学と東京外国語大学がこうした協定を結んだのは初めてであり、私自身の経験を通して二つの大学の交流を強化され、また将来、べつの研究者が私と同じくこのプログラムを活用できることを強く望んでいる。